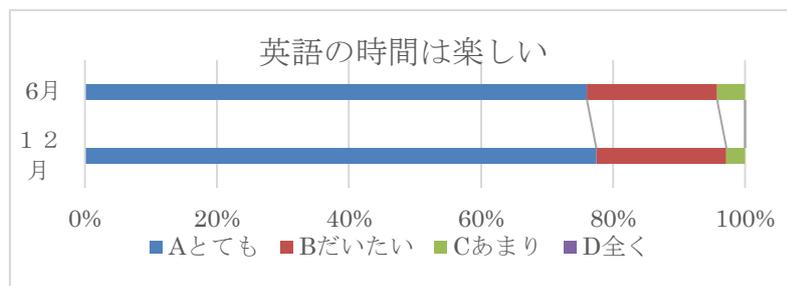


## IV 研究の成果と課題

### 1 研究の成果

#### (1) 【視点1】興味・関心を高める必然性のある場面設定

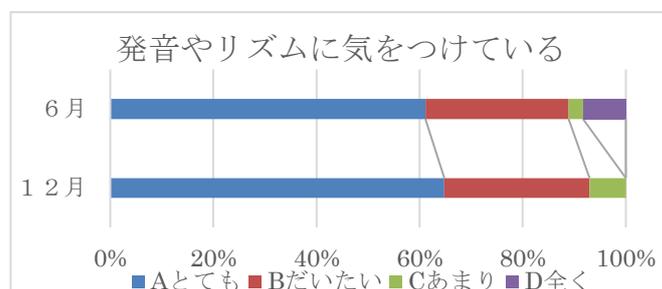
意欲を高める題材、場面設定の工夫に取り組んだことで、児童の意識調査では、「英語の時間は楽しいか」の問いに、「とても」「だいたい」と答えた児童が6月、12月共に90%を超え、12月は6月よりもさらに増え98%に達した。場面設定の工夫により児童の興味・関心を高めることができた。



場面設定の工夫により児童の興味・関心を高めることができた。

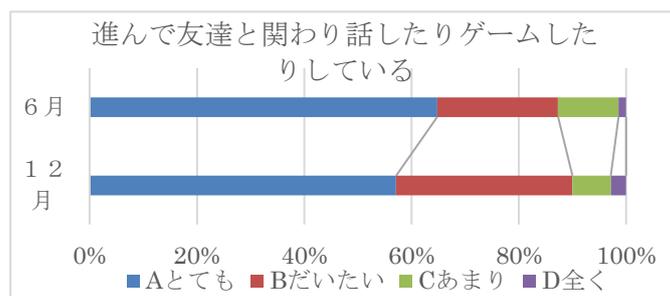
#### (2) 【視点2】一人一人が英語に慣れ親しむための工夫及び低、中学年の系統化

英語指導員やALTの活用により、児童が英語の音声やリズムに慣れ親しむことができた。意識調査では、「英語の発音やリズムに気を付けて話しているか」の問いに対して「とても」「だいたい」と答えた児童は6月は88%、12月は90%をこえた。チャンツやゲームなどで、一人一人が発話できるように繰り返し練習したためである。



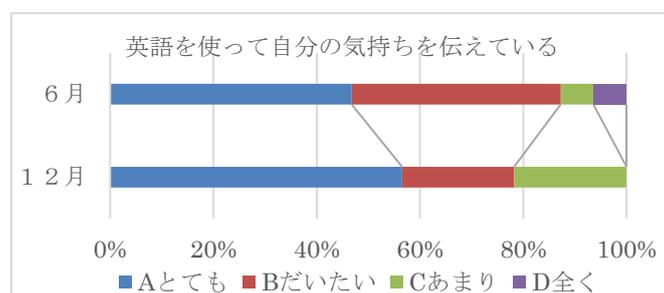
また、低学年から始めた英語の学

習により、音声やリズムに早くから慣れ親しむことができ、中学年の学習にスムーズに移行できたからと考えられる。

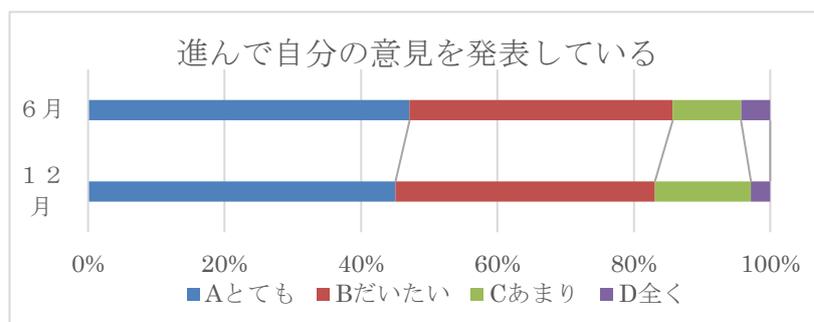


#### (3) 【視点3】他教科との関連

「英語で気持ちを伝えているか」の問いに対して、「とても」「だいたい」と答えた児童は6月の85%から7ポイント減少しているが、「とても」が増え、「全く」は0人となった。「進



んで意見を発表しているか」(中学年のみ)の問いも、85%から3ポイント減少しているが、「全く」が0人となった。英語科の学



習で、自分の考えを伝える場をゴールに設けることで、ALT に英語の言い方を積極的に尋ねるようになった。自分の考えを伝える意欲は、他教科にも生かされている。

また、「なぜ英語を学習するのか」の問いに、12月には「暴力でなく、言葉を使って話し合いをして、けんかを解決したいから。」と答えた児童がいた。英語の学習を自分たちのくらしと繋いで考えていたと思われる。

#### (4) 【視点4】 評価の工夫

活動途中の中間評価によって、児童がコミュニケーション活動のポイントを意識し直して活動を再開することで、よりよい会話になり自信や意欲を高めることができた。

学習の終末に、コミュニケーションのポイントや、めあての達成について尋ねることで、友達のくらしに関心を示して感想を述べる児童が増えてきた。英語の学習が子ども同士の交流や理解に生かされている。

## 2 課題と今後の志向

- 英語で自分の気持ちを表現しきれていない児童がいる。さらに、いろいろな表現に慣れ親しみ、互いを知りあう場面を設けていきたい。
- また、児童が考えた対処表現を紹介したり、理由を尋ね合ったりして、会話が深まる体験を一人一人の児童に広げていきたい。
- 今後も、英語学習の本来の目的を見失わず、身に着けたコミュニケーション力をくらしや集団作りに生かす視点をもって取り組んでいきたい。